

空軍ニュース：中国ステルス無人機“利剣”の開発状況

漢和防務評論 20160831 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国が米軍の X-47B によく似たステルス無人攻撃機”利剣”を開発中です。2013 年に試験飛行の写真が公表されましたが、その後の動きは不明です。中国消息筋によると、将来艦載機としての運用を考慮しているとか。開発航空機会社は従来 JL-8 など練習機を主に開発してきた洪都航空集団です。同社は、試験飛行の成功を宣伝材料に株式を発行し一般から資金を調達しようとしています。開発はその後の進展が不明で、誇大広告となっています。

KDR 東京特電：

秘密のベールに包まれた洪都航空工業集団（洪都航空）（前身は南昌航空機製造公司）の“利剣”無人攻撃機の開発について新たな情報が入り始めた。洪都航空は、“利剣”の試験飛行の宣伝効果を利用して同会社の株式を推奨している。中国人は株取引が大好きである。軍事工業某社の株式市場の動向を研究することは、同社の装備技術の開発状況を掌握する重要な手段でもある。この点は、かつてのソ連とは全く異なる。

洪都航空は、株式を宣伝する文章の中で次のように述べた：無人戦闘機は、わが社の高成長を強力に推進するであろう。市場価値は無限であり、無人機は将来戦闘機の発展方向でもある。わが社の発展空間は巨大であり、3 年程度で空軍に納入開始される計画である、と。まさにスーパーマーケットの宣伝文句である。これは 2013 年 11 月の宣伝広告である。この時間計算によれば、“利剣”は 2016 年下半期には納入開始されるはずである。しかしこれは株式の宣伝に過ぎなかった。試験は進展しているようであるが、今年中に納入される可能性はないと KDR は見ている。

株の宣伝広告では、“利剣”の性能について次のような説明があった：“作戦半径は 1200 KM、空母に載せて第二列島線まで進出する。最大離陸重量は約 10 トン、航続距離 4000 KM、ペイロードは 2 トン、利剣の開発成功は、中国空軍の攻撃能力を効果的に高めるであろう。今後 20 年間の中国の無人戦闘機の市場規模は、2000 億元以上になる計画である。その他の軍用無人機、民用無人機の市場規模は、460 億元である”と。

見るところ、洪都航空の発展は、“利劍”無人機にかかっているようだ。2000年以來、その他の航空機会社の発展は迅速であったが、洪都航空だけが遅れ、成都及び瀋陽航空機会社にはるかに及ばなかった。その理由は中国空軍から大量の注文がなかったからである。L-15型練習機は空軍に採用され JL-10 と称せられた。しかし同練習機はやっと納入され始めた段階である。練習機 JL-8 は、輸出量が多いが、中国市場での需要は少ない。練習機の利潤は戦闘機に比べれば小さい。

上述の株式宣伝文から次のことが分かる：“利劍”は中国海空軍の共同開発であり、将来艦載機としての考慮がなされていること。現在は主として空軍が装備している。中国海軍の真の戦略意図がここに明確に示されている。すなわち第二列島線の制覇である。

基本性能から見て、“利劍”の攻撃能力は当時の F-117A ステルス攻撃機と同等程度である。すなわち一旦“利劍”が部隊に装備されたとき、中国空軍は、F-117A と同等の攻撃力を具備することになる。2トンの搭載量は、2乃至4発の誘導爆弾が搭載可能であることを意味する。2013年に公開された“利劍”の試験飛行の写真は、同機が RD-33 エンジンを搭載していることを示した。しかも赤外線放射を低下させる処理は行っていなかった。

3年前の“利劍”の試験飛行の状況はどうであったのか？若干確認できたことがある。中国航空工業内部では“利劍”は相当秘匿度が高いようだ。消息筋の多くは、試験飛行の状況を話したがらなかった。しかし今年中に部隊配備されることには KDR は疑念を持っている。閻良試験飛行センターでは“利劍”が試験飛行を行った形跡がない。このことは、この3年間で“利劍”の試験飛行に技術的問題が発生したことを意味する。KDR が掌握した情報から見て、“利劍”は少なくとも3回の試験飛行を行った。現在、原型機は1機だけである。洪都航空は、“利劍”専用の格納庫を建設している。

今年7月以降、洪都航空は、“利劍”の宣伝に力を入れ始めた。「中国航空報」は特集記事“洪都の大型ステルス無人攻撃機”において次のように報道した：2013年5月、その先進的低反射インテークは、エンジンを搭載し、1ヶ月に及ぶ実験を行った。2013年11月21日初飛行に成功した。2014年、特異なエアロダイナミクスと全く新しいインテークによる飛行制御技術の実験は重大な進展を見た、と。

そうであれば、“利劍”の飛行制御システムは信頼を得たことになる。

ステルス材料に関して、KDR 記者は偶然にも中国航空工業第703研究所の専門

家を取材した。彼は率直に次のように述べた：彼らは特別なチャンネルを通じて米国航空機のステルス材料を獲得した、と。これは、コソボ紛争で撃墜された F-117A の残骸を指しているに違いない。この談話終了後、KDR 記者は、わざわざベオグラードまで出かけて行って当時撃墜された F-117A のその後の状況を把握した。

同消息筋は次のように述べた：30 年前から同研究所はステルス材料の研究を開始し、2005 年前後に相当大きな成果を獲得することができた。同所が研究するステルス材料とは、主として塗料型電波吸収材、ベニヤ板型電波吸収塗料、泡沬型電波吸収塗料である。例えば、BIAWAT-B 系列のレーダー電波吸収塗料は、X 及び KU バンド、2 乃至 8GHZ の低周波バンドのレーダーに対して一定の電波吸収効果がある。色彩は、F-117A の機体表面に似た黒灰色である。

SEC シリーズのレーダー波ステルス塗料は主としてガラス繊維強化プラスチック及び炭素繊維等、非金属の表面に用いられる。消息筋は、この種の塗料は炭素繊維で作られた弾道ミサイルの弾頭部分に用いられることを特に強調した。ロケット軍の戦略弾道ミサイルの弾頭にも類似の塗料が用いられ、米国 NMD の探知能力を大幅に低下させる可能性がある。XFT は、合成ゴムを基礎とする電波吸収材で、2 層に分かれる。X、KU、C バンドレーダーに対して一定の吸収効果がある。消息筋は、このシリーズのレーダー電波吸収材料は主として艦船に用いられる、と述べた。

以上の情報から見えること。中国の研究機構は、F-117A を標準とするステルス塗料はすでにマスターし、あとは運用ができるかどうかの問題であろう。

また“利剣”のエアロダイナミックス研究は、中国の次世代戦略爆撃機の開発に応用される可能性がある。KDR は、第二世代のステルス爆撃機（中国航空工業内部では、“大轟”と称している）がすでに事業化されているのを知っている。

“利剣”が真に脅威となるのは台湾、沖縄及び周辺国家の重要戦略目標である。F-117A は、第一次湾岸戦争開始時期、2000 ポンドのレーザー誘導爆弾を最初の一撃としてイラク防空司令部に投下し、防空システム全体を麻痺させた。現在公開された“利剣”の写真を見ると、通信アンテナ、データリンク用アンテナをはっきり見ることができる。中国は、YL-1A 等攻撃型無人機の開発過程で、これらの最も複雑な技術問題をすでに解決した。UAE での展示射撃にも成功している。

上述の株式の宣伝から、洪都航空は、空軍が Q-5 攻撃機に代わり“利剣”を大

量に購入することに希望を託しているように見える。

以上